

東京大学 留学プログラム報告書 (プログラム名:2012 IARU Global Summer Program)

所属学部/研究科・学年(留学時): 法学部 3年

留学先大学・参加コース: シンガポール国立大学 Asia Now 1 - Southeast Asian Cosmopolitan Urbanism

コース期間: 2012年6月25日 ~ 2012年7月13日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

シンガポール大学はシンガポール西部に位置し、広くてきれいなキャンパスを持っています。

2. 留学の動機

正直なところ法学部の授業を欠席したくなかったのですが、それでも今回 IARU GSP で留学することに決めたのには主に二つの理由がありました。第一に、普段と違う環境に身を置き、様々な人や物に出会うことで自分を相対化し新たな発見をしたかったということ。第二に、普段とは違った分野の勉強もしたかったということ。講義題目は専門分野とは直接の関係がないものの、リベラルアーツ的な学習の最後の機会になるかもしれないということで受講を希望しました。特に今回の NUS のプログラムを選択した理由としては、第一に、東南アジアという地域を自分の目で見て感じてみたかったということ、第二に、様々な研究の出発点にある、自ら一次情報を得て把握する、というフィールドワークについて勉強したかったということ、第三に、欧米の大学は今後大学院留学の可能性が高いと思ったので今回はアジア方面の方に興味を持ったこと、などがあります。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

純粋に自分が興味の内容・大学のものを選びました。講義を3週間も欠席せねばならず、しかも参加するか否かの決断を法学部のシステム(欠席についての取り扱いなど)や時間割、ゼミなどがわかる前にせねばならなかったため、かなり迷いもありましたが、貴重な経験になると思い、思い切って申し込みました。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

不要でした。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

留学保険については NUS の全員強制加入のもの、海外旅行傷害保険については VISA ゴールドカード付帯保険を利用しました。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

教務係に留学許可届を提出しました。また、演習・民法基礎演習の担当教官には欠席する場合の扱いにつき質問し、演習については「それであれば考慮するから行って来るように」、民法基礎演習については出席点は機械的につけるので特に考慮できない(3回=3点分)との回答をうけました。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

TOEFL iBT 94点

特に直近の法学部での学習では基本的に日本語しか用いておらず、これといった語学学習はしていませんでした。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

特に思い当たりません。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

NUS の用意した寮に滞在しました。なお、私自身は苦に感じませんでしたが、寮にはエアコンがなく扇風機だけでした。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

高温多湿の気候でしたが、苦ではなく、すぐに適応できました。広い大学のキャンパスの中にコンビニや食事場所が充実していましたが、周辺には繁華街や観光スポット的な場所はありません。校外に出かける際はバスとMRTを利用しました。時刻表や路線図の表示がわかりにくく決して使いやすいとはいえませんが、頻度・価格に問題はありませんでした。食事は食堂や近隣のフードコートでとりました。どれも安価で美味でした。クレジットカードと現金を持参しました。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

シンガポールの治安はよいのではないかと思います。医療機関については、一度ハチに刺されて医務室の世話になりましたが、良質なサービスでした。なお、医薬品は一通り日本から持参しました。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空費約 13 万円、授業料・雑費 2 万円強、食費・娯楽費・その他約 3~4 万円、計約 20 万円

⑤奨学金(支給していた場合は、支給機関・支給額など)

JASSO より 8 万円

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

はじめのうちは放課後に街にでかけることもありましたが、後半は展示会の準備等で忙しく、結局あまりキャンパスから出かける時間はありませんでした。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

Asia Now 1 – Southeast Asian Cosmopolitan Urbanism

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

いわゆる「講義」は、はじめに教室で導入としてなされた数回の講義(少人数でしたがきわめて標準的な、教授が話し生徒が時々質問するというスタイル)と数回のフィールドツアーでの説明(ツアーガイドのような形式)のみで、メインは学生によるフィールドワークとその前後の教授も交えたディスカッション、学生による展示会の準備であり、全体として教授の関与は少なく、学生間でのやりとりが主でした。予習のための文献も提示されましたが、座学よりも現場を重視する趣旨の講座だったため、講義に直接は関係しない参考文献程度の扱いであって、興味のあるもののみ各自で読むという扱いでした。ただし、グループの誰かが活動日誌としてのブログを更新するという課題が毎日あったため、何日かはそれにとりかかりました。コースを通しては、やはり自分達で行ったフィールドワークが最も印象に残っています。

③学習・研究面でのアドバイス

母語話者を前に英語での議論の主導権を握ることはなかなか難しかったです。内容自体のレベルが特に高いというわけではなかったため、自分の考えを臆することなく相手にぶつけることが大事だと思います。

④語学面での苦勞・アドバイス等

標準的なアメリカ英語を話す一人の生徒を除き、教授・生徒ともシングリッシュ・インド訛りの英語・オーストリア英語など標準的とはいえ聞き取りづらい英語が多く、苦勞しました。とはいえ普段からそうした英語に触れるべきというわけでもないでしょうし、母語話者にとってはシングリッシュも難なくわかるようなので、標準的な英語をよりよく理解できるようにしておくことが必要なのだと感じました。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

特に大学のサポート体制を意識する機会はありませんでした。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

インターネットについては、寮の部屋では有線 LAN(ケーブル持参)、寮のコモンルームや図書館では無線 LAN を利用しました。

貸出・閲覧のために図書館を利用しましたが、広々としており快適でした。食堂の価格・質とも満足のものでした。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

『地球の歩き方』

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

普段と違う環境に身を置き、普段と違う仲間・教授陣と勉強することは視野が広がることにつながります。日程などの条件さえあえば是非留学なさるとよいと思います。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

今回参加したコースは「Asia Now 1 – Southeast Asian Cosmopolitan Urbanism」というタイトルで、community, neighborhood, nationhood, tourism といった大きなテーマのもと、「an old cosmopolitan port-city」「a heritage tourist destination with UNESCO WHC status」としてしばしば捉えられるマラッカにおいて実際にフィールドワークを行い、そうした既存の思考枠組 frame を疑い、自らの frame でマラッカという都市を捉えよう、というものであった。1 週間マラッカに滞在し、班分けや班内の分担があったが、私は、UNESCO 世界遺産の区域のやや外にある Tengkerai Pantai という地域を歩いて住居や宗教施設などを観察したり住民にインタビューをしたりした。私の主な学習テーマは、「しばしば an old cosmopolitan port-city として捉えられるマラッカだが、はたして cosmopolitan といえるだろうか」、というものであった。詳細は省くが、以下、その内容を簡潔に記したいと思う。

複数の ethnic group が対立せず一定の地理的空間に共存しているときに multi-ethnic、そのうえで互いを尊重し交流する関係が見られるときに cosmopolitan と言うとすると、フィールドワークをしたところでは、multi-ethnic community は観察されたものの cosmopolitan community が観察されたとはいえない、というのが私の認識、結論である。建築様式にも受容の跡や多様性がみられ、住民の祖先も多様で混血もすすみ、宗教施設をみてもスラウ、中国系寺院などが点在し、各家庭にも中国・マレーの祭壇がおかれている、そしてそれら多様な要素が地域的な住み分けをみせているのではなく混在している、マレー系・中国系・インド系などに表立った対立もみられない、という点から、multi-ethnic であるといえる。しかし、人々の中に「マレー」「中国」「インド」といったアイデンティティは根強く存在している、近隣関係が濃密とは思えない、様々な ethnic group の子供たちが通い一見協調的にみえる学校でも中国系・マレー系などでグループができている、ときに非マレー系にはブミプトラ政策への反感が潜在しているようである、不利な立場の中国系は海外に出て行って貧しい者が残っているという事実ないし認識があり、地域への愛着からそこでの生活を選ぶというよりもそれ以外の選択肢がないからそこにいるということも考えられる、といった点からすると、結論として cosmopolitan community が観察されたとはいえない。

翻って cosmopolitan community の存立条件について考えてみる。「マレー」「中国」「インド」といった ethnic group の認識と同時に集団間での交流がみられるためには、それとは別次元の「地域住民」「マ

レーシア国民」「地球人」といった認識、アイデンティティが必要になろう。この点、他者の尊重と交流というのはアイデンティティに限った話ではなく普遍的な価値観の問題なのではないかとも思えるが、他者の尊重は他者への共感からくるもので、それは「自己を相手に重ね合わせる」ことからくる（アダムスミスの『道徳感情論』のように）と考えれば、自己同一視≒帰属意識≒アイデンティティの問題に還元できそうである。しかし一般に帰属意識はカテゴリーが広くなればなるほど、外形的であればあるほど、希薄になるものであり、やはり文化や出自、特に言語にもとづく ethnicity としてのアイデンティティというのは強く、消えないのは当然で、そのうえで別途「マレーシア人」ないし「マラッカ人」「地域住民」してのアイデンティティを共有できるのか、という問題になろう。マレーシアはこうした「民族」政策として基本的にブミプトラ政策をとっているが、多文化共生・コスモポリタンの観点からは、それは部分的には肯定できても部分的あるいは決定的に否定される。教育で基本的にマレー語という一つの言語を使うという点に関しては、cosmopolitan community では単に各集団が各言語を使用するという状況を是認するだけでなく人々の一定程度以上の交流が必要で、そのためには共通語が必要ということを考えれば、肯定される。マレー語でなく中立的な英語にすることも考えられるが、マレー語にしたという選択については必ずしも否定できない。しかし、ブミプトラ政策は、その他各方面でブミプトラに特権を与えるという点において「他者」を意識させることになり、むしろ同一性よりも差異を強調しかねず、肯定できない。これは例えば中国系のマレー系に対する感情や中国系の自己意識に影響するだろう。ブミプトラ優遇政策というのは一部にはアファーマティブアクションとして正当化されようようだが、出自に基づく取り扱いの差というのは合理的な区別とは言い難く、ブミプトラのための国をつくる、という nation state づくり・nation building にどれだけの正当性があるのか、私には疑わしい。multi-ethnic community が観察されつつも cosmopolitan とはいえなかったのは、culture や ethnicity そのものからくる亀裂というよりは政治的・経済的な亀裂に由来するのではないかと思う。経済的な衰退が彼らの交流の機会を減らし、政治的な分断政策が彼らの距離を広げたのではないか。

最後に、フィールドワークをした Tengker Pantai が heritage に値するかという点について考える。ある地域を heritage として指定すると、それに伴う規制から、住民の自由を制限することになる。また、この地域は住宅地域であり heritage に値するとしてもそれは住民の日常生活それ自体なので観光資源には向かず、単に保全するという類のもので、人々が訪れることもできない。こうしたことを考えると当該地域を heritage として指定するには高い程度の価値が求められるが、私は、cosmopolitan community といえて初めてその水準を満たすと思う。したがって、Tengker Pantai を heritage site に組み込むべきだとは思わない。

以上が今回のコースで学んだことの概要である。実際に何日間かにわたり未知の地域に足を運び、空気を感じ取り、住民にインタビューをするということをして初めてわかったことであった。それは NUS の学生としてでなければできなかったであろう貴重な体験であった。そして、Tengker Pantai について考えたことは、ethnicity, culture, identity, nationalism, nation state, heritage, tourism など様々なテーマについて再考する端緒となった。日頃から nation state を中心とするウェストファリア体制に疑問を抱いていた私としては、社会的共同体だけでなく政治的・法的な共同体というものは構成員が帰属意識を共有しその共同体と権力に正当性・正統性を見出すことで初めて成り立つものであると思うから、今回 identity や nation state についてあらためて考えるきっかけとなったのは有意義であった。

さらに、こうした内容面での収穫に加えて、何よりも、各大学から集まった学生たちと友人になれたことが大きな収穫であった。様々な大学・学部から集まり、様々なバックグラウンドを持ったほぼ同年代の人々と共同生活をし、ともにフィールドワークを行い、ディスカッションをするという経験は、こ

れまでとはまた違った仲間に出会うという点で、自分の視野を広げることにつながったと思う。フリーの時間には他愛無い談話から各国事情、時には原発事故問題、原爆投下の決断、日本の東南アジア侵略も含めた時事問題に至るまで、幅広い会話を楽しむことができた。彼らとは今後も末永く付き合いたいと思う。なお、参加前は、法学部での学習がきわめて面白く、正直なところ留学についてしばしば耳にするほどの重要性を見出しておらず、日本でも十分勉強できるではないか、わざわざ外国に行って英語を使って勉強することにどれほどの意味があるのか、と疑問に思っていた。しかし、今回留学を経験し、短期ながらも外国で暮らし、外国の大学に通い、世界中の仲間と英語を用いて勉強したところ、外国に目を向けることによって出会う学び・仲間の幅が広がるのだということにあらためて気づかされた。今回は学際的なコースであったこと、全員がその分野について初心者であったことなどから、正直あまり深い議論になったとも思えないが、今後、今度は専門分野で留学し、また新たな出会いをし、より深い議論をし、学びの幅を広げたいと思う。

所属学部/研究科・学年(留学時):経済学部3年
留学先大学・参加コース:シンガポール国立大学 Asia Now 1
コース期間:2012年6月25日 ~ 2012年7月13日
卒業・修了後の就職希望先: 5.民間企業

1. 留学先大学の概要

シンガポール第一の大学。キャンパスは中心部から少し離れているが、40分ほどでいける。
敷地は広く、インターナショナルな雰囲気。

2. 留学の動機

高校の頃から留学に憧れており、長期留学をしたいと思っているが、その前に一度短期留学をしてみたいと思った。
各国から集まった仲間とともに学ぶというスタイルも魅力的だった。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

申し込み後のやりとりは NUS と直接やるので、こまめにメールをチェックし、ほかの参加者と確認すべきです。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

なし

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

クレジットカードの保険のみ

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

単位認定なし

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

TOEIC945 特になし

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

LAN ケーブル

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舍の様子、見つけた方法など)

寮、学校が用意

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

部屋に冷房はないが、大きな扇風機がある。

食事はおいしく安い、基本的に大学内で過ごしたのであまりお金は使っていない

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安は良好、衛生状態もいいので特に問題はない

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空費7万5千円 その他の費3万円

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

JASSO 8万円

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

観光、発表の準備

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

Asia now 1

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

マラッカでのフィールドワークが中心でした

③学習・研究面でのアドバイス

フィールドワークに集中してやる、その後の発表準備が一番大変でした。

④語学面での苦勞・アドバイス等

シングリッシュが聞き取れず苦勞した。先生なども普段なれているアメリカ英語ではないので聞き取りにくかった。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)

すべてきれいです。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

シンガポールは暮らしやすく、初めて留学するのによいと思います

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

私は高校生の頃から海外に憧れていたもので、大学に入学したら必ず留学をしたいと思っていました。もともと国際理解に興味を持っており、留学という形ではなくても国際交流プログラムのようなものに

は数回参加していました。しかし国際交流、国際理解が目的である、そうしたプログラムと違い、留学は勉強、学習がそもそもの目的であるので、今までとはひと味違った、英語での学業に集中するという体験ができました。ただ仲間と話しているだけではだめで、研究結果を発表するという目に見える形で成果を求められている点が大きく違ったように思います。また3週間という期間も、初めての短期留学としてはちょうど良かったと思います。

今回私が参加したプログラムは座学よりも実践、つまりマラッカでのフィールドワークに重点を置いているので一般的ないわゆる留学とは少し異なるかもしれません。参加したコース自体が「コスモポリタニズム」がテーマだったので、国際性と地域性、異文化共存など国際理解に関して重要なことを、折に触れて考えさせられました。そもそも IARU に加盟している世界中の各大学から生徒が集まっているのでアジア、ヨーロッパ、アメリカなど参加者自体が多様性に富んでいて、彼らと自国の文化、慣習についてお互いに話すことも大変面白く、刺激的でした。例えば以前オーストラリアに留学したときに北京大学の学生が日本人学生から聞いたそうなのですが、日本の学生はあまり勉強しないのかと聞かれました。それを聞いて少し恥ずかしくなりました。また、一学期あたりにテストが1週間ほどある、ということをお知らせしたら、オーストラリア以外の学生は非常に驚いていました。こうした教育制度の違いから食べ物の話まで、様々な点について日本とはどのような国なのか改めて考えるよい機会になりました。

シンガポールについてのイメージも大きく変わりました。今まではシンガポールというと中国人が多いというイメージしかありませんでした。しかしインド系の人も多く、今まであまりみたことのないヒンドゥー教の寺院や、イスラムのモスク、など異なる文化が一つの国に存在しているという日本とは全く正反対の環境におり、何もかもが新鮮でした。またリトルインディア、チャイナタウン、アラブストリートなどがあること、多岐にわたる料理があることにも象徴されていると思います。

コースの内容は、具体的には5、6人のグループに分かれて、それぞれ与えられた地域に5日間毎日通って地元の人々にインタビューしたりしながらその地域性、観光地というフレームにはめられた、世界遺産都市マラッカについて理解を深めていくというスタイルでした。そしてその成果をシンガポール国立大学の博物館で展覧会というかたちで発表するというものです。展示物も自分たちの手でフィールドワークの過程で集めました。普通の旅行や留学ではある特定の地域を集中的に研究し、地元の人々と交流するという機会はあまり得られないと思います。私のグループが担当した地域はマレー系が住む地域と中国系が住む地域の2つでした。2008年にマラッカが世界遺産に指定されて以来、マラッカへはたくさんの観光客がやってきています。しかしその一方で世界遺産の指定は、元々いた中国系住民が新しいホテルをつくるために住みかを奪われ、別のところへ移動させられるというマイナス要素ももたらしました。そこでは、特に中国系が大半をしめているシンガポールとの対比で、マレーシアではプミプトラ政策のもとマレー系が優遇され、中国系が隅に追いやられているという状況もあります。このコースを通して学んだ、大事なことはすべて何かをみるときに、私たちはある種の“frame”を通さざるを得ないということです。世界遺産というのも一つの見方であるし、一方で普通の住民の暮らしが犠牲になっているというのも別の見方です。

そもそもコスモポリタニズムというのは、異なるバックグラウンドを持つ人々がただ寄せ集めとして存在するだけでは足りないと思っています。彼らが交わるとまではいかななくても、お互いのことを認めて共存することが必要です。国際的に何かをするときには必ず文化などの違いが問題となりますが、それは異なることが問題なのではなく、その違いを認めることで乗り越えられるはずで

はじめにも述べた通り、私はもともと長期留学をするつもりでおりましたが、今回の経験を通してま

すます留学への思いが強まり、絶対に留学に行きたいという決心ができました。しかし英語力の面ではまだまだがんばらなくてはならないというのが正直な感想です。今まではアジア系の学生との交流が多く、あまりネイティブスピーカーと話す経験は多くありませんでした。やはり優秀な学生たちと高度な内容をディスカッションするにはまだなれておらず、さらなる英語力の向上を目指したいと思いました。

シンガポールはアジアの経済の中心地でもあり、中国系、マレー系、インド系など様々な人種が集まっていて、街にも大学にも至るところにグローバルな雰囲気が漂っており、アジアへの興味もいっそう高まりました。日本とは違って活気があり、日本ももっと国際感覚を養わなければシンガポールに追い抜かれてしまうのではないかという危機感も感じました。

また今までは英語圏への留学しか考えておりませんでした。今回シンガポールでは中国系が多いこともあって、町でも中国語を聞く機会が多く、北京大学の友達もたくさんできました。そこで私が第二外国語として学んでいる中国語も英語とともに一緒に学べる場所を留学先として考えるようになりました。帰国後早速留学について調べ始めましたが、中国か香港、台湾あたりで英語と中国語を両方学ぶことのできる所を探しています。今回の留学が、次の長期留学への架け橋としたいと思っています。